



一つのことばかり思い、考えているとおかしくなる。これは一つの漢字でも仮名でもいいが、じっと見ていると、妙なことになる。その形が不思議なもの、逆に見慣れないもののように思えたりする。文字はさっと見ればそれで分かる。あの漢字ではなく、この漢字というように、読み違えなければ良いのだ。

文字と違い、気になるような事柄は、当然気にし続ける。もうそのことばかり一日中考えたりすることもあるだろう。世の中は広く、世界も広い。色々なものが詰まっている。当然色々なものが見えたり聞こえたりする。それらを押しのけて、ある一つのことだけで頭が一杯になると、これは違うものが見えてくる。それ以上思わなくてもいいようなこと、考えなくてもいいようなことまで思い巡らし、推測したり予測したりするためだろう。これは楽しいことなら、そういう時間は至福の時だろう。ただ、楽しいことより、不安なことの方が長く頭に滞在するようだ。楽しさは長続きしないためだろう。不安なこと、心配事の方が尾を引きやすい。

楽しいことは考えなくても、思わなくても大丈夫だが、不安なことは身に大事が起こる可能性があるため、これは生存のためにも必要なのかもしれない。

不安が未来を設計するとは言わないが、転ばぬ先の杖を欲しが。それは余裕のある場合で、しかも常識内だ。

常識外の、何かよく分からないようなこと、妄想に近いことで頭が一杯になると、これは気の病と言われても仕方がない。ただ、本人にしか、その重要性が分からないこともある。

というようなことを妖怪博士が語る。

「先生、それが妖怪とどう結びつくのですか」

「思い詰めると塊ができる。瘤だな」

「そこに来ますか、コブに。そこから妖怪が」

「塊というのはカイ」

「カイとも読みますねえ」

「この塊、瘤じゃな。これは塊より怖そうな漢字だろ」

「はい」

「体にできたイボのようなものをじっと一日中見ていた男がおる。すると、どんどん大きくなっていく。実際には大きさは変わらぬのにな。そこばかり見ておるからより詳細に見えるため、大きくなったように見える。そのうち、こぶとり爺さんのような大きな瘤になる。ボールほどにな。しかし、実際には瘤の大きさは変わっていないのじゃ」

「それは何という瘤の妖怪ですか」

「まさか、瘤膨らまし妖怪とは言えん」

「そですねえ。あまり怖くないですし、神秘も感じられません」

「瘤は具体的でいいが、心の中の瘤は、これはしこりのことだが、見えん」

「はい」

「だから、それが見えるようにしてくれるのが、瘤の妖怪じゃ」

「それで、名前は何と云うのですか」

「瘤鬼」

「コブ記ですか」

「瘤の鬼と書いて、瘤鬼じゃ」

妖怪博士付きの編集者はそこで顔を横に向けた。

妖怪博士がよく使う手で、単に字面だけで妖怪を作る悪い癖を見抜いているためだ。

了